



産消提携みかん産地「無茶々園」の現状

片山 元治

昨年夏の潮風台風は、私達の住む直径 20 キロ以内の被害が甚大だったようです。地形条件でしょうか。

平成 4 年の台風 19 号以来、異常高温、異常乾燥、異常大雨、風速 50m を超える台風など、記録を塗り替える異常気象が毎年当たり前のよう起きるようになりました。

それ以来、異常気象、温暖化の影響は柑橘農業にボディーブローのようにじわじわと効き始めました。かつて、当地（愛媛県西予市明浜町）は温州みかんでは国内で 5 本の指に数えられるほどの有名産地でしたが見る影もありません。昭和 40 年代の温州みかん暴落期には、果敢に晩柑類に切り替えたことで、暴落危機を乗り越えました。平成の気象異常危機はいつまた来るかもわからない不安の中で、生産構造の改革が思うように出来ず、深刻な問題となっております。

昨夏の台風で決定的なダメージを受けた中堅の農家が意欲をそがれ、呆然とするなかで、余命いくばくもない老人達が、先祖が築いた段畑を荒らすわけにはいかないと、みかん山に行き、潮風で再生不能な木を切り始め、つられて若い連中もノロノロと山へ行くようになり、今年の春は、その畑に 20,000 本の苗を植えたのです。

かつて、1,000 万円以上の販売金額のあった農家が、今年度はほとんど 300 万円台。一体農家は何を食べて生活しているのか。じいちゃん、ばあちゃんの年金を分けてもらっているのか。農協の共済を解約して生活しているのか。とても今年のような生産では、食っていけないはずです。今年植えたみかんが一人前になるには 5 年がかかります。その間どの

ような生活をしていくのでしょうか。子供を学校に行かせている農家は大変に深刻だと思います。

異常気象から来る収入減は、農家にとって努力しても努力が報われないつらい問題です。それでも、みかんしか食べていく術を持っていない農家にとって、みかんにしがみついて生きていくしかないのです。都市から遠い僻地ほど職業の選択の自由はありません。

異常気象、温暖化から来る不可抗力の生産不安。社会的には、高齢化、農協・自治体の合併等による地域切捨て政策。本当に田舎で生きていて大丈夫かという不安。小土地所有制度の崩壊による大規模農業への不安。グローバル化の中で国際競争の不安。などなど、今や、農家にとって息子が継がせる農業経営が見えなくなってきました。

無茶々園では塩害に強い防風林を植えたり、思い切った改植を進め、園地の再生に努力を始めたところ。また、当地は海に近いので、潮風台風の被害を分散させるには出作りを共同でやることを始めましたが、苦戦をしているところ。田舎切捨て政策に対しては、自分たちの住む村は自分たちで整備する。元気な年寄り達の「孟壮コンドルの会」を中心に社会インフラの整備と年寄りの新しい生き方の模索が始まりました。中堅農家には経営指導を強め、企業農業に進むのか、多様な兼業に進むのか選択を迫っております。

また、海外の研修生の受け入れも、少しずつ軌道に乗り始め、秋にはベトナム Daklack 省の研修生の受入れが数十人規模で進む予定です。そして、北条農場では、ニートと呼ばれる「21 世紀の新人類」の受け入れが始まりました。

こうした農業不安を取り除く種は蒔いているのですが、解決までには至っておりません。今年は無茶々園グループ全体で、創業以来、初めての実質赤字決算になりそうです。みかんを売りたいくても売れるみかんがないといった状態でした。それでも挫けずに、明るく元気で、壮大な夢を抱いて、みんなで頑張って生きたいと思っています。引きこもらない田舎、世界に開かれた田舎を目指して…。

（愛媛県明浜町 農事組合法人無茶々園代表）